

《第八話》

オチヨウばあさん

むかし。

北向の里にオチヨウというばあさんが住んでいました。このばあさんは金もうけの上手な人で一代で大金をためました。

ばあさんは田畑もたくさん作っていましたが年貢米を出すと家で食べるのはオカボ、くず米、麦などで、上等の米は全部みんなに貸しました。大ていの百姓は年貢を出すとやれやれ一安心とタラフク食っている中、米がなくなってしまう。それで米もちの人から借りて食うのです。新米で二倍払うのがならわしでした。

オチヨウばあさんは一倍半にしました。米のなくなるのは五月から九月頃まで、払うのは十二月までです。オチヨウばあさんは本当に困る人には貸しただけもらいました。

オチヨウばあさんはお金も貸しました。普通は年一割二分から一割五分、高い人は二割以上でした。オチヨウばあさんは一律最低の一割二分にしました。ばあさんの徳は部落はおろか他部落まで評判が高くなりました。年の暮など「門前市いちをなす」という程人々が来ました。米や金を持